

# 文学と安積開拓

## 宮本百合子と中條政恒

中條政恒の孫で、作家の宮本百合子（中條百合子（ユリ）。宮本顕治と結婚して、宮本百合子となる）は、祖母・蓮が住む開成山を毎年のように訪れ、そこで貧困に苦しむ開拓民たちの現状を知る。17歳で開拓地を舞台にした小説「貧しき人々の群れ」を発表した。

百合子の祖父政恒は、明治33年（1900）に亡くなっている。前年に生れた百合子が祖父と触れ合う機会はなかった。しかし、政恒が残した品々や地元の人々の様子などから、その人となりや行いが伝わったことが、百合子が書いた祖父にまつわる話からうかがい知ることができる。百合子のプロレタリア作家としての原点は、祖父政恒が奔走した開拓地にあるといえるだろう。



宮本百合子



宮本百合子文学碑  
開成山公園内に建立された文学碑。



中條邸と中條家の人々  
右から百合子の父・中條精一郎、妹・寿江子、弟・国男、母・葭江。



中條邸址碑  
開成緑地（郡山市開成2丁目）。昭和41年（1966）4月に中條邸が取り壊された際に、郡山文化協会有志により碑が建立された。



市民会館  
写真提供・郡山市  
昭和33年（1958）年に完成した市民会館は、百合子の弟である中條国男が設計した。百合子の父・精一郎も建築家であった。

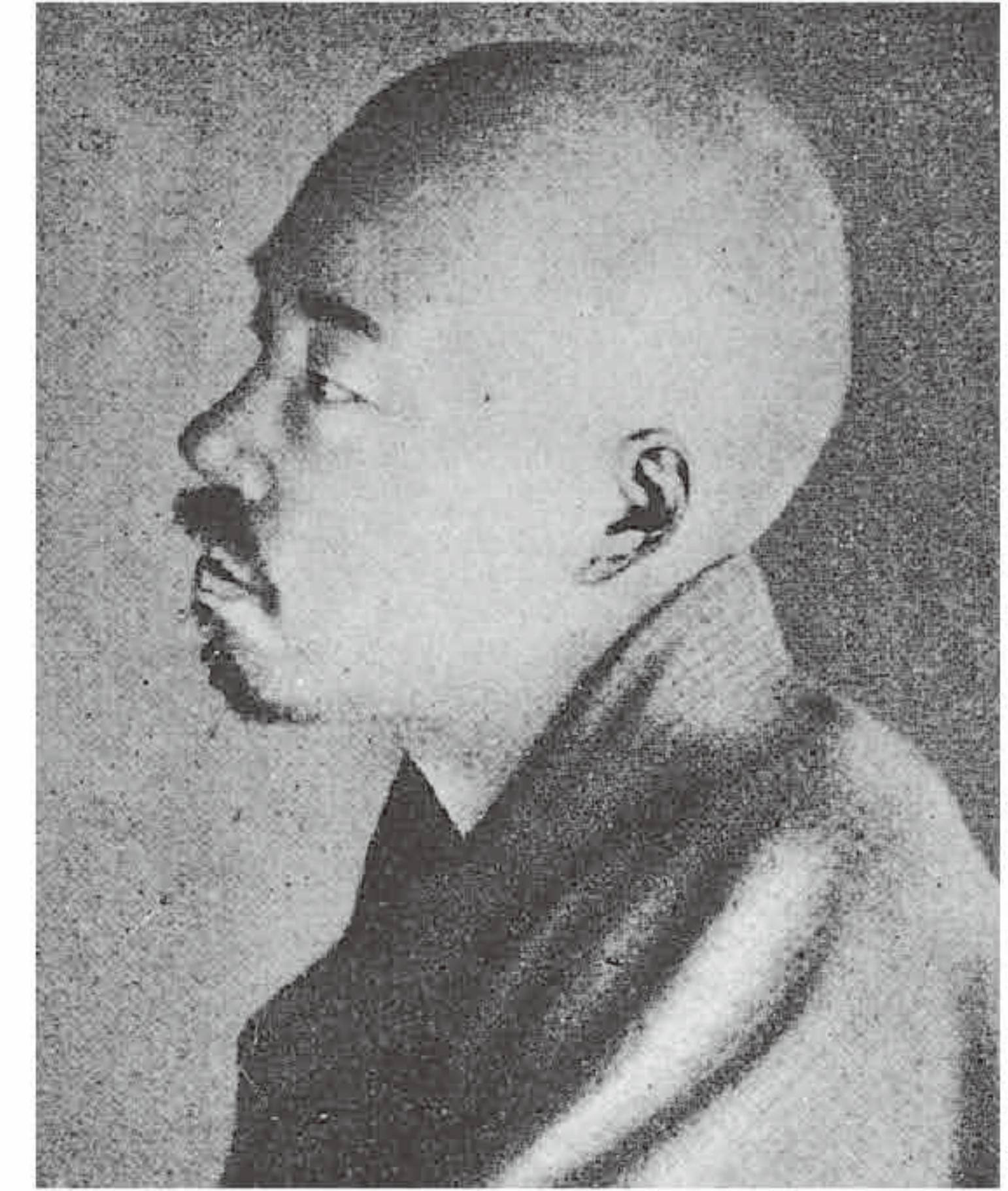
## 開拓地と文学

近世の宿場町・郡山では、商人はもとより、飯盛女（遊女）まで俳句に親しんだ。この郡山の人々が、戊辰戦争で大きな被害を受けた郡山を復興し、さらに安積開拓に尽力していく。

こうした文学的土壤を背景に、明治期に行われた安積開拓により町が大きく発展し、急速な近代化が進む中で、多くの文学者が生まれた。久米正雄、宮本百合子、石井研堂、高山樗牛、鈴木善太郎、諏訪三郎、中山義秀、真船豊、東野辺薰…。彼らのうち、石井研堂、中山義秀、鈴木善太郎、久米正雄は金透小学校（各時代により郡山学校、郡山第一尋常小学校と名称が変わる）に学んだ。また、高山樗牛、鈴木善太郎、中山義秀、東野辺薰、久米正雄は安積中学（現在の県立安積高校）に学んでいる。

明治31年（1898）に俳句結社「群峰吟社」が結成された。永井破笛、湯浅十絃、国分虎風らが発起人となり結社されたもので、優れた俳人が参加していた。久米正雄も入会し、その才能を開花させた。

句会には、河東碧梧桐や高浜虚子、内藤鳴雪なども来訪し、参加している。松尾芭蕉の『奥の細道』にならった旅行で、正岡子規も郡山を訪れている。



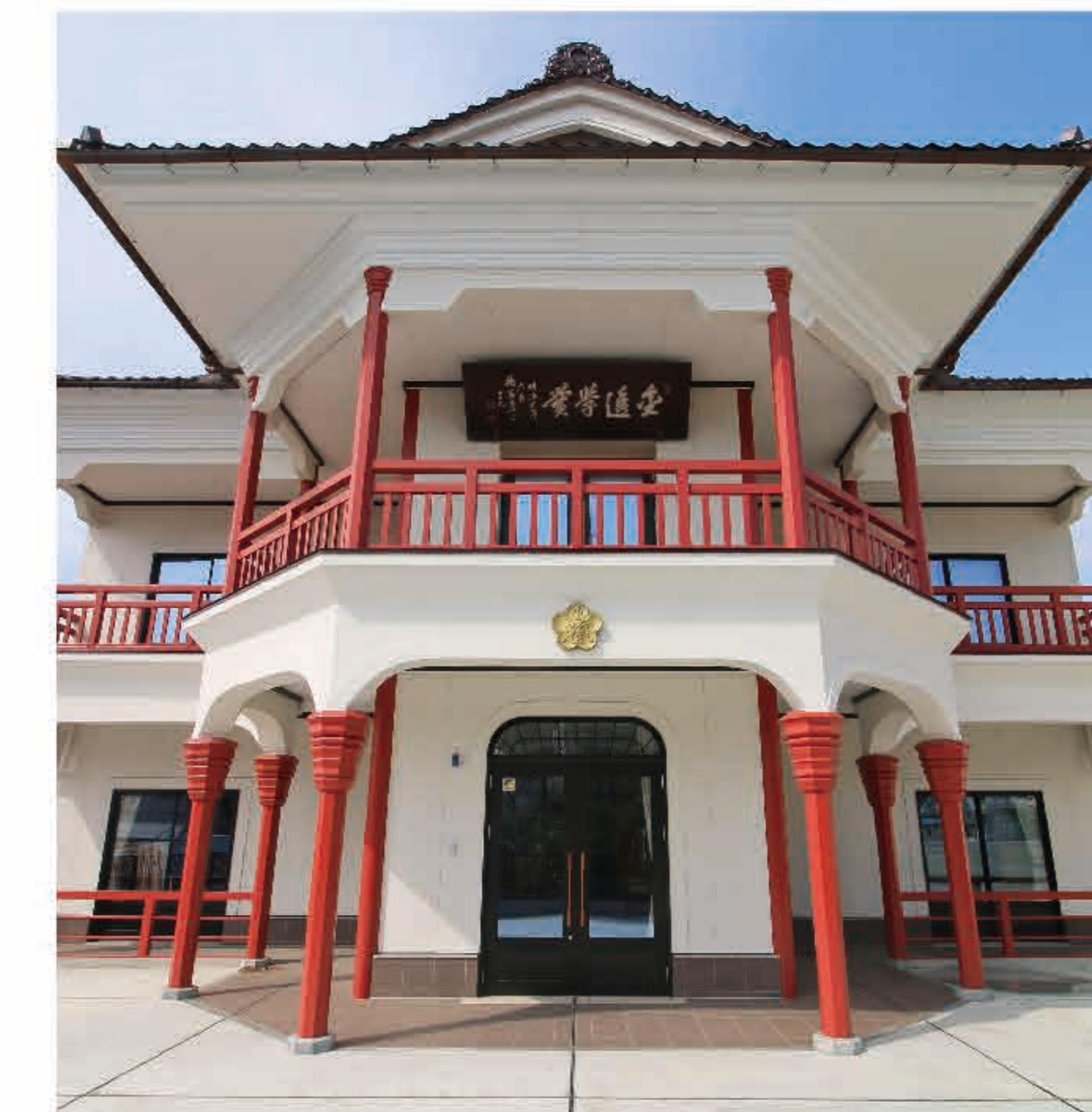
正岡子規  
写真提供・国立国会図書館



明治初期の郡山学校（現在の金透小学校）



遊女の碑  
麓山公園内に建立された碑。郡山上町で旅籠屋を営む佐々木露秀が抱える遊女が詠んだ句が刻まれている。



金透記念館  
写真提供・郡山市  
金透小学校地内。昭和53年（1978）に復元されたもの。



安積歴史博物館  
写真提供・郡山市